浦井研究会レジュメ（2024.09.21）
報告者：猪木

1）「知」の分類
・アリストテレス『ニコマコス倫理学』（第六巻）概略
（参考資料：福澤諭吉『文明論之概略』 第六章）
・ヴィーコ『学問の方法』（三 新しいクリティカの不都合）
第一真理として、確実さ、厳密さを求めたデカルトへの批判 ➡ 人知の有限性と不完全性
近代ヨーロッパの学問 ➡ 知識の確実性を求めて「方法」の探究を進めれば進めるほど、学問の「生」に対する有意味性が見失われる
・共通感覚（常識）の育成の重要性、賢慮の基準、雄弁の基準
・若者にはまず記憶力と想像力を十分に発揮できるように鍛え、次いで、論理的判断力の鍛錬
・クリティカのみがもてはやされトピカが軽蔑される
➡ まずトピカを教授し次いでクリティカ
・「真らしいもの」（verisimilia）を、虚偽と同様なものとみなし知性から追放してはならない
・ただし、トピカ主義者はしばしば虚偽を捉え、
クリティカ主義者は「真らしいもの」を捉えようとはしないことも確か

・D. ヒューム『人性論』（略）
絶対的知識（knowledge）と蓋然的知識（probability）

2）デモクラシーと市場システムの是非は学知（エピステーメー）だけでは探究できない
・Voting：一人一票（デモクラシー） と 「円」による投票（マーケット）
・双方とも、真、善、美の価値の実現のための制度ではない
e.g. 学の真理は多数決で決まるわけではない
・「自由」と「平等」の incompatibility
自由が平等を歪め、平等が自由を侵食する
・個人主義と物質主義への傾斜

デモクラシーにとって必要な条件
健全な中間層の存在
・地方自治の成熟
・司法への参加（政治制度としての陪審制度）
・結社（aasociations）による繋がり（少数派への防波堤）
公共精神（public spirits）：「いま、わたし」から「未來、われわれ」へ
宗教とデモクラシー

参考資料　アリストテレス『ニコマコス倫理学』のおける徳（卓越性）の分類

魂のもろもろの卓越性（徳 アレテー）の区別

倫理的性状（エートス）の卓越性（moral virtue）（第二巻）

行為の習慣化（情念でも能力でもない）

「中」を選択すべき「状態」

各論：「勇敢」「節制」（第三巻）

財貨、名誉、怒り、人間の接触、quasi-virtue：羞恥（shame）（第四巻）

正義 の分類 ⇒法的正義（法に適っているか）

交換の正義（交易なくして共同関係なし、交易は均等性なくして成立せず、
均等性は通約性なしには存在しない）（第五巻）

知性（デイアノイア）に関する卓越性（徳）（intellectual virtue）（第六巻）

知性を**認識的（contemplative）部分**と**勘考的（calculative）部分**に分ける

認識的部分の目的は**純粋な真理認識**、

勘考的部分の目的は**実践的な真理認識**

主たる知性的な徳　（肯定とか否定とかの仕方で真を認識するところのもの）

1）「その端緒がそれ以外の仕方においてあることのできないもの」

・学（エピステーメー Science）— **論証されうる事柄に関わるもの**
demonstrative knowledge of the necessary and eternal

・直知（ヌース Intuitive reason）— 論証されえない第一原理や定義に関わるもの
knowledge of the principles from which science proceeds

・**智恵（ソフィア Philosophic wisdom）**— 直知と結びついた学
The union of intuitive reason and science

2）「それ以外の仕方においてあることの可能なもの」

・技術（テクネー Art）— 制作（making）に関わるもの
knowledge of how to make things

・**知慮（フロネーシス Practical wisdom）**— 行為（acting）に関わるもの
knowledge of how to secure the ends of human life

知慮（フロネーシス）の分類（Stewart に拠る）

・知慮 — 一身に関してに過ぎない知慮

・家政 — 家政術

・政治（国に関しての知慮）

政治（国家に関しての個別的な仕方における知慮）　審議術、司法

立法（国家に関しての統括的な仕方における知慮）

参考資料

公、私、智、徳のマトリックス

（福澤諭吉『文明論之概略』巻之三、第六章「智徳の弁」より）

	私	公
智 （インテレクト）	物の理を究めて 之に応ずるの働 （工夫の小智）	人事の軽重大小を分別し 軽小を後にして重大を先にし 其時節と場所とを察するの働 （聡明の大智）
徳 （モラル）	（一心の内に属する） 貞実、潔白、謙遜、律儀など	（外物に接して人間の交際上 に見はるゝ所の働） 廉恥、公平、正中、勇強など

徳義（モラル）は「心の行儀」で、「一人の心の内に快くして屋漏に愧じざるもの」を指す。智（インテレクト）は、事物を考え、事物を解し、事物を合点する働きである。ここで福澤はさらにそれぞれを「公」と「私」に分ける。（ここの論の進め方は、明快で議論の深みを失わせない福澤らしい卓抜な技である）したがって、徳、智、公、私で、2×2のマトリックスが出来上がる。ではこれら4つ要素は各々具体的に何を指すのか。

1）私智は物の理を究めてこれに応じる働きをさす。いわゆる受験秀才の多くはこのタイプの智恵に秀でている。碁知恵、算勘、すなわち碁が強い、計算が速いという能力もこの私智に属する。established knowledge はこれに関わるものがほとんどであろう。

2）私徳は貞実、潔白、謙遜、律儀など、「対自的」な個人の範囲に限定された徳を指す。ときにメディアが好んで取り上げる金銭やセックス関係のスキャンダルもこの私徳に関するものがほとんどである。メディアが政治家を叩くときはこの私徳にまつわる醜聞が多い。

3）公徳は廉恥、公平、正中、勇強など、いわゆる「対他的」「社会的」な徳である。正義の感覚に富んでいるか、大勢の前で少数意見でも堂々と発言できるか、フェアーであるか、名誉を重んじるか、などにかかわる徳である。

4）そして最後の公智は、事柄の軽重大小を分別し、何を優先すべきかを時と場所とを察しつつ判断する働きを指す。この、「何が大事か、何を何に優先すべきか」の判断力は「聡明の大智」と呼ばれ、福澤が最も重視する智恵であった。